



「対話型」という指導スタイル

一般的に、講師が生徒に対して 1 から 10 まで懇切丁寧に解説してあげるような指導がまだまだに主流です。確かに生徒にとっては勞せずして知識や正答を得られるため、“わかった！”という快感を得るには十分かもしれません。しかし実は、このような一方的な解説授業は生徒が受け身の姿勢になりがちになるため、高い学習効果を得ることができないのです。

LAB07 では、一般的な一方通行の指導ではなく、生徒の思考力を刺激し続けるような双方向的な“対話”を重ねることで生徒自らが自発的に理解を深められるようこころがけています。

■「国語ができない」のも、「文章題が苦手」なのも、「コミュニケーション力」が弱いから

ネット社会といわれる昨今、発言の一部だけを切り取られて本人が意図せず“炎上”してしまったり、受け取り手に配慮することなく軽い気持ちで不特定多数の人に不快な思いをさせる発言を発信してしまったりする場面が多々あるように、発信する側も受信する側もコミュニケーションの足りない世の中になりがちです。同時に子どもたちの「他者を受容し、自らの考えや思いを発信する力=コミュニケーション力」もまた、年を追うごとに低下しているように感じます。本来、教科としての国語には、ただ漢字や文法などの言語を学んだり、文章を読み解いたりするだけにとどまらず、物語文・小説を通じて「相手の気持ちを思いやる心」を深めたり、説明文・論説文を通じて「他者の主張や考えを理解する力」を高めたりする役割があります。

また、国語のみならず算数・数学や理科・社会などで文章題を苦手とする子は多いですが、その要因のほとんどは、「隅々まで読まずに問題の一部の単語を見ただけですべてを理解した気になるので、結局問題の意図を十分に汲み取らずにわからなくなる」ことによるものです。問題文を正確に読みとる力は、相手の意図を汲み取る力へとつながっています。いわば「問題を解くこと」とは、「問題作成者とのコミュニケーションのやり取りである」といえるのです。LAB07 で生徒との対話を重要視するのは、この「相手の意図を汲み取る力」を恒常的に鍛えるためでもあるのです。

■一言返事でおわらせず、生徒自身に「説明させる」

例えば、「宿題できた？」や「今日の学校どうだった？」という問いかけに対して、子どもたちが「はい(うん)」「いいえ(ううん)」「ふつう」「まあまあ」というような答え方をした場合、LAB07 なら、「だいたい正解率は何割くらいで、自分がどのような問題で間違える傾向があるのか教えて。」「君の”ふつう”は世界共通の感覚じゃないから先生にはよくわからないなあ。今日、学校でどんなことがあったのか、わかるように説明してよ。」などと聞き返します。同じように、宿題の確認、予習内容の解説、間違えたところの解説など、「どこが分からなかったの?」「どこまで理解していてどの点が理解できないの?」「なぜこういう答えになると思う?」など、一言だけでは返せない、説明を要する問いかけを積極的に行っています。こうして対話を重ねることが、日常的に使える語彙を増やし、コミュニケーション力を高めることにつながります。また、自分で説明するという方法は、内容を十分に理解していないとできないため、書き取り練習や教科書にマーカーをひくだけの作業よりも断然効率の良い勉強法の一つとして、最近注目されています。

■頑張っただけじゃダメ、間違えたり失敗したりしても大丈夫

当然、最初のうちはなかなか話せなかったり、戸惑ったりすることはよくあります。また、時には使い方を間違えたり、言葉に詰まったりすることもあります。しかし、LAB07 では一貫して「頑張っただけじゃダメ、間違えたり失敗したりしても大丈夫」というスタンスで接しています。時間はかかるかもしれませんが、コミュニケーション力の成長に終わりはありません。楽しく、そして何度でも果敢に挑める環境を作り続けたいと考えています。